



2017.1.29



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

### 恵方巻き

早速、コンパスを手掛かりに、今年の恵方「北北西やや右」に向かって皆で神妙に食した。

2月4日は二十四節気の「立春」。冬至と春分の中間点で、暦の上では春の始まりとされる。実際、各地の日平均気温を平年値で見ると、あたかも立春に合わせたかのように上昇に転じ始める。そもそも物体の温度は、表面に流入する熱量が流出する熱量を上回れば暖まり、逆は冷える理屈。ちょうど立春の頃から日射量が夜間の放射冷却量を上回り始めるため、地面も暖まってくるからだろう。

これからは冬型の気圧配置が緩むと、南寄りの風も吹く。偕楽園の梅のつぼみも一段と膨らむ。立春から春分の間に初めて吹く南寄りの強い風は「春一番」と呼ばれる。去年は2月14日だった。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

2月3日は「節分」。家庭では「福は内、鬼は外」と豆まきが行われ、神社もにぎわう。また柊(ひいらぎ)の小枝に焼いた鰯(いわし)の頭を付けた「柊鰯」を飾り邪よけする地方もあるという。しかし、最近よく目にするのは、関西地方が発祥といわれる太巻き寿司「恵方巻き」だ。節分に、年の恵方に向けて黙って寿司を頬張り、願いごとをするとかなえられるという。

先日、新年会の席で、客人が酒のさかなに加えて恵方巻きを作ってくれた。節分の先取りだ。



2017.2.5



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

### 霰降り

に、零度以下の雲粒(過冷却水)が衝突して凍り付く過程を繰り返して生まれるもので、地面にぶつかると、バタバタなどと音が出る。枕詞は霰のこんな様を形容したのだろうか。ちなみに「霰」と「雪(ひょう)」は大きさで区分され、霰は直径が5ミル未満、雪は5ミル以上である。

立春が過ぎた。日はより高く昇る。太陽が真南に来る時の高度を「南中高度」と呼ぶが、今日はちょうど45度で、冬至の30度に比べて5割も高く、日はまぶしいくらいだ。

このところ暖かい天候に恵まれたが、最新の予報によれば2月初旬から下旬は平年並みかあるいは低い見込みだ。2月の旧暦「如月(きさらぎ)」は、寒さで着物をさらに重ねる「着更着(きさらぎ)」とも言われる。冬物の整理はしばらく先のようなだ。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

暖かい冬晴れの下、「J1鹿島」の優勝を祝う記念パレードが1月30日、鹿島神宮周辺で行なわれ、約1万5千人のサポーターや市民が詰めかけた。神宮社殿前では優勝の銀皿(シャーレ)とカップが披露され、鹿島神宮のお神酒「霰降(あられふり)」も供えられていた=写真。万葉集に「霰ふり 鹿島の崎を波高み 過ぎて行かむ 恋しきものを」の歌がある。波崎の海岸に打ち寄せる高波を前に詠んだといわれており、霰ふりは「鹿島」に懸かる枕詞(まくらことば)だ。気象学で「霰」は、氷の微粒子が落下する際